肘歴通信第十三號

「肘折金山」のこと

～金を掘っておるうちに銅鉱が出て、
今では銅山になりそうじゃ、という～

肘折金山の発見は、明和年間(1764～1772)と云われています。今なお、金山地区、黄金温泉、黄金山、金堀坂などの地名にその名残を残しています。

しかし、山形県史収録資料の中には、寛永 11 年(1634)年、「新庄藩領内の南山烏川」での砂金堀りの普請の古文書があり、上記に該当する可能性があるのは肘折金山だけなので、もっと古くから肘折では金の採掘が行われていたと考えられます。

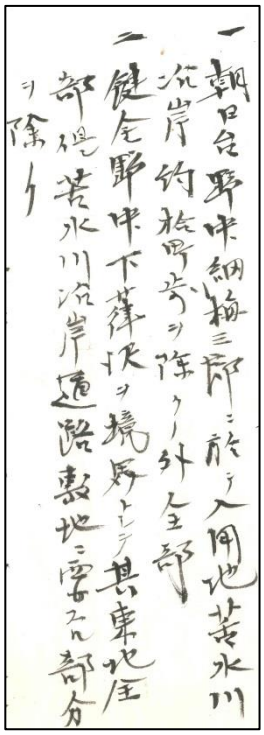
天保５年の「新庄御国産名物尽」の番付では、西の関脇「永松銅山」東の関脇「肘折出金」と並び称され、新庄藩の重要な財源であったことが伺えます。

２枚目へ続く→

１枚目の続き→

明治 14 年の「明治天皇御巡幸記録」には、新庄周辺の名物が天覧に供され、「肘折金、立谷沢砂金御買上」とあり、月山立谷沢の砂金と区別されています。

明治 36 年には、北村山楯岡の代議士細梅三郎氏が朝日台・鍵金野・金山周辺を買収。最新機械で本格的な採掘を開始。



（細梅氏より再び地区へと払下げられた明細）

しかし、掘り進めるうちに金鉱よりも銅鉱が多くなり、金の採掘を中止し、銅の採掘・精錬へと移行。

この頃、肘折温泉を訪れた河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）は、肘折金山を散策し、呑気な操業ぶりを事務員から聞いて、「ささやかな　鉱山あるや　栗拾い」と詠んだ。

明治 40 年には、石川県金沢市の横山章氏が細梅氏より権利を譲り受け、機械を一新して事業拡大。

「合名会社横山鉱業部　大蔵鉱山」を設立しました。

そしてこれから、大蔵鉱山は最盛期を迎えます。　(次号へ続く)

肘折歴史研究会